

ほとけさまの 手のひらで

①

将来はお坊さん。そう言われて47年がたちました。資格を取り四半世紀が過ぎたことに、自分でも驚いています。会社勤めをしたり、大学院で研究したり、いつから僧侶に本腰を入れたのかも定かでありません。気づいたら「お坊さん」になっていました。

僧侶の多くが世襲であることには批判的な人がいることは承知しています。かくいう私も世襲僧侶。22歳の私に立派な発心があつたかといえ、ノー。家業を継ぐ意識しかありませんでした。

自坊は、1953年に祖父が建立した歴史の浅い小さなお寺。ゼロからの出發で苦労した祖父は、孫に男児が生まれ、たいそう喜んだとか。私が8歳の時に亡くなりますが、溺愛ぶりとともに、そこに3代目への強い期待が込められていたこともはつきり覚えてています。

その期待は、檀信徒さんからも感じられ、「私の葬儀は坊ちゃんにしてもらわないと」といふた言葉は、幾度もかけられたものです。

父から「うちは寺だけじゃ食えないから、就職を考えて大学を選べ」と言っていた私は、就職に強そうな早稲田大学を選びました。わが浄土宗では、一般大学に進んでも夏3週間×3

回と冬3週間×1回の修行道場を経れば僧侶資格が取れるシステム。大学2年の夏休みに最初の修行に臨みました。

覚悟もなく入った修行生活。

プライバシーはなく、徹底的に管理される日々。数日にして、「下山して、桂文治に弟子入りして落語家になろう。その方が人を幸せにできるはずだ」なんて、現実逃避も甚だしいことで頭はいっぱい。そんな私の脳裏に次に浮かんだのは、祖父と、檀信徒のおじいさん、おばあさんたちの顔でした。

修行を中断し、後を繼がないと宣言するのと、今を耐え、僧侶になるのと……後者のほうが私はすっと楽でした。

「敢えて主とならずして客となる」。自己主張せず、いつも受け身でいよという意味で、思春期に出会い、感銘を受けた老子の言葉です。これから1年間、そんな私の僧侶としての日々や研究生活について書いていきます。

(浄土宗蓮宝寺住職)



おがわ・ゆうかん 1977

年東京生まれ。早稲田大卒業後、

東大大学院博士課程単位取得満期退学。専攻は宗教学。大正大地域構想研究所主幹研究員。「生死・自殺に向き合う僧侶の会」などの社会活動にも従事。

(随時掲載)

ほとけさまの 手のひらで

②

端、私に勝手なイメージが投影される。それが恥ずかしく、とはいへ実情を説明する術はありませんでした。

お坊さんにはふたつの名前があります。戸籍名と僧侶としての僧名。私は、どちらも「有閑」。待望の跡継ぎ男子に歓喜した祖父が名付けました。しかし幼稚園に入り、「僕の名前、変わっている」と気づいてから、自己紹介はなるべく「小川です」で済ませるように。

名前と同様、「普通」の家庭にも憧れがありました。家が「寺」というのが恥ずかしくなつてしまつたのです。名前も親の仕事も聞かれたくない。「お寺の子?」と気づかれずに、やり過ごしたいと思うようになりました。

というのも、わが家の日常生活と世間が描くお寺やお坊さんのイメージとに大きな隔たりがあつたためです。

「肉は食べない」「滝に打たれる」「靈を見られる」。それでも当てはまりません。「お寺つて金持ちなんだよね」「お父さんは外車に乗つてゴルフに行くの?」と、坊主丸もうけ的イメージには辟易。自坊は普通の日本家屋に毛の生えたようなもの。父は車はおろか免許すら持ちませんでした。

でも、「寺の子」とバレた途

ところが、大学院に入ると、新たなギャップに直面します。宗教学は「宗教とは何ぞや」を研究する学問。大学院生たちは、さまざまな宗教に向き合い、普遍的な何かを探求しています。当然ながら、そこで扱われる宗教は、崇高なもの。一方、私の「僧侶生活」は全く崇高ではありません。

「現代日本のリアルな寺・僧侶」の役割とは? 内側にいる人間ならではの研究をしてみたい。思えば、有閑と名付けられてからのモヤモヤを解決するための試みでもあつたのかもしません。(浄土宗蓮宝寺住職)



おかわ・ゆうかん 1977

年東京生まれ。早稲田大卒業後、東大大学院博士課程単位取得満期退学。専攻は宗教学。大正大地域構想研究所主幹研究員。「自死・自殺に向き合う僧侶の会」などの社会活動にも従事。
(随時掲載)

ほとけさまの 手のひらで

③

2006年、大学院の指導教授から社会課題に取り組む僧侶を調査するアルバイトを紹介されました。日本仏教は「葬式仏教」と揶揄され、生きている人々に向き合わないと批判されますが、現代社会の問題を取り組む僧侶を取材し、事例をまとめた仕事でした。

初回のテーマは、自死。当時は、年間3万人以上の人人が自ら命を絶ち、自死が社会課題として認識されるようになった頃。私も04年に、親友を自死で亡くしていました。

私は、各地の僧侶に会いに行きました。

ある僧侶はインターネットで生きづらさを抱える人の相談を受け、自死で著名な場所に赴き、彼らとオフ会を開催。命を絶つた方々の冥福を祈ることで、彼らの気持ちは生きる方向に向かうのだそうです。「死んで生きる」という禅の教えから着想を得たと話していました。

また、お寺を駆け込み寺として24時間開放している僧侶は、家族を寺とは別の場所に住ませ、寺を「苦を抱えた人の場所」として徹底させていました。

感銘を受けたのは、「あなたの電話、お聴きします」と門前に張り紙をし、無料相談を受け続ける僧侶の話。「お寺はもともとそういう場所。わざわざ掲示する必要はない」と僧侶仲間からとがめられたそうですが、その方は「それであなたのお寺には相談者が来るのですか?」と一蹴。寺院業界は古い体質で、同業他寺の厳しい目が常にあります。たかが張り紙とて、強制的な意志がないと続けられるものではありません。

それまでの私は、法事などを通じ、檀家さんと関係を深められることにやりがいを抱いていました。一方で、これだけでいいのか?と物足りなさを感じていました。大学と寺だけの生活で、社会に関われていないという不安もあつたのでしょう。

調査で出会う僧侶たちは、私はまぶしいほどでした。次第に亡き親友に「おまえはどうするんだ?」と、僧侶の本分を問われているような思いがして、いつしか私も活動する側に。人生を変えたアルバイトになりました。
(浄土宗蓮宝寺住職)

◇ ◇ ◇

おがわ・ゆうかん 1977

年東京生まれ。早稲田大卒業後、東大大学院博士課程単位取得満期退学。専攻は宗教学。大正大地域構想研究所主幹研究員。「生死・自殺に向き合う僧侶の会」などの社会活動にも従事。

(随時掲載)

自死が問う 僧侶の本分 小川 有閑

ほとけさまの 手のひらで

④

2008年2月に「自殺対策に取り組む僧侶の会」（現「自死・自殺に向き合う僧侶の会」）に入会し、本格的に自殺対策に取り組むようになりました。会では、1月から手紙相談を始めたばかり。生きづらさを抱えた人や自死遺族から手紙をいただき、僧侶がお返事を出すというものが、私を含めて10人ほどの僧侶が参加しました。

仲間同士で手紙の文案をチェックしたうえで清書・投函するのですが、なかなかOKが出ません。今思うと、「僧侶だから悩みを聞くのは当たり前」「仏教で悩みを解決してあげよう」という思い上がりがあつたのかかもしれません。それを見透かされたように、仲間から「悩みを受け止めていいない」「お説教じみている」と指摘が入ります。

まだ世間には知られていないかつたため、2月末時点での相談は7人でした。ところが3月頭に入り、ある新聞の社会面にカラー写真付きでこの件が掲載され事態は一変。自分たちの活動を目にとめてもらえたことを喜んだのもつかの間、手紙が殺到したのです。1週間で毎日10通

以上のお手紙をいただきました。

お待たせしてはいけないと、会員一同、寝る暇を惜しんで返信の文案を考える日々でした。それでも手紙は続々と届きます。長い方で3カ月以上、お待たせしてしまいました。

手紙の量が増えても、仲間のチェックは甘くなりません。文案を考えては書き直しの繰り返し。新しい相談だけでなく、返信のさらに返信が届きます。当時は常に誰かへの返信を考えていました。

あれから16年たちました。現時点で私が受け取ったお手紙は500通を超えます。一通一通にそれぞれの苦しみや不安がつづられていました。その方のそばに寄り添えるわけではない私に、いつたいどれほどのことができたのか。

もし、あの頃の私にアドバイスできるなら、「手を差し伸べるなんておこがましい、ちょっと隣で話を聞くくらいしかできないんだから、もっと肩の力を抜きなさい」でしょうか。

（浄土宗蓮宝寺住職）



おがわ・ゆうかん 1977

年東京生まれ。早稲田大卒業後、東大大学院博士課程単位取得満期退学。専攻は宗教学。大正大地域構想研究所主幹研究員。「自死・自殺に向き合う僧侶の会」などの社会活動にも従事。（随時掲載）

ほとけさまの 手のひらで

(5)

私が所属する「自死・自殺に向き合う僧侶の会」では、自死遺族が体験や思いをシェアする分かち合いの会「いのちの集い」を2009年6月から毎月開催しています。

初めて「いのちの集い」に参加した時は、不安でいっぱいでした。自身は友人を自死で失う経験をしていましたが、もつと近しい間柄だったら、どれほど悲しみになるのか。想像すればするほど、ご遺族の苦しみを受け止め切れない不安を感じたのです。

「いのちの集い」でお会いしたご遺族は「どうして気づいてあげられなかつたのか」「自分が幸せになるなんて自分で許せません」「あの日からモノクロの世界を生きています」と自責の念や後悔を口にされました。ずっとこういう気持ちを抱えてこられたのでしょう。自死への偏見が強い日本社会では、死因すら人に言いつらい状況です。「おつらいですね」と言うべきなのでしょうが、それがなんの慰めにもならないようと思え、言葉が出ませんでした。

「いのちの集い」では、4~6人のグループでお話をします。時には長い沈黙が続くことがあります。時に進行役の私は、話を促さなければと焦るばかり。20秒の沈黙が2時間くらいに感じられました。

どうが何度も沈黙がくり返されると、私の気持ちに変化が。ただ耳を傾け、「ここにいるだけいい。皆さんは僧侶の言葉が聞きたいわけではない。安心して思いを話せる場を求めていれる。沈黙も、語るために必要な時間なのだ。それからは、不安を感じることが減りました。

しばらくたち、ある自死遺族の講演を拝聴しました。「自死遺族だから怖がらないで。四六時中泣いているわけがない。私たちも普通に買い物するし、テレビを見て、笑いもする。分かち合いだから安心して泣いているんです」と。自分が恥ずかしくなりました。

あの頃、私もきっと怖がっていたのです。「自死」で家族を亡くした特別な人たち、と勝手に縁引きをし、「自死」への偏見を抱いていたのもそれません。

(浄土宗蓮宝寺住職)

自死遺族の思いを共有 小川 有閑

おがわ・ゆうかん 1977年東京生まれ。早稲田大卒業後、東大大学院博士課程単位取得満期退学。専攻は宗教学。大正大学構想研究所主幹研究員。「自死・自殺に向き合う僧侶の会」などの社会活動にも従事。

ほとけさまの



手のひらで

⑥

生きていれば必ず誰かの死を体験しなければなりません。人は死別をくり返しながら生きるわけですが、このときさまざまな気持ちが起ります。悲しみばかりではなく、何で死んでしまったんだという怒り、あのどきこうしてあげれば、自分がああしなければと後悔や自責の念に駆られます。ときには解放感や安堵^{あんづく}を覚えることもあります。

みなさんはこうした感情を、誰かと分かち合つたことはあるでしょうか。私がグリーフケアという言葉に出会つたのは2008年、自死遺族支援の研修でのことでした。

グリーフとは死別体験にともなう悲嘆反応。遺族がグリーフケアに折り合いをつけていく過程をグリーフワーク、他者がそれをサポートすることをグリーフケアと呼びます。グリーフケアは、遺族の感情をありのままに受け止めることが肝要と教わりました。

当時、祖父母や友人との死別体験しかなかつた私も、その後、父と母、20年間暮らした猫を看取り、グリーフケアの考えがわが事としてふに落ちたように

思います。

初めて在宅介護をした父の看取りでは、心のどこかでホッとしました。がん臓病の末に亡くなつた母のときは、弔問に来てくださつたお檀家さんに何度も話を聞いてもらつうち、悲しみが和らいだものです。父母を看取つても涙ひとつ出なかつた私ですが、猫の葬儀は嗚咽でまともに読経ができませんでした。

今では、グリーフケアは新しい特別な理論ではなく、はるか昔からの人間の自然な営みなのだと思うようになりました。通夜で故人の思い出話に花を咲かせる。葬儀で遠慮なく泣く。弔問客はその嘆きに耳を傾け、遺族はそれに支えられ励まされる。故人との永続的なつながりを見いだせた時がグリーフワークのゴールとする説もあります。

私たちは死者供養を通して故人とのつながりを築いてきました。慣習の中で自然とグリーフワークをしていました。慣習が失われつゝある今、グリーフという言葉を通じて、僧侶として執り行つてきた儀式の意義を考えなければと思つています。

(浄土宗蓮宝寺住職)

◇ ◇ ◇

おがわ・ゆうかん 1977

年東京生まれ。早稲田大卒業後、東大大学院博士課程単位取得満期退学。専攻は宗教学。大正大地域構想研究所主幹研究員。「自死・自殺に向き合う僧侶の会」などの社会活動にも従事。

(随時掲載)

供養通し故人とつながる 小川 有閑

ほとけさまの 手のひらで

(7)

自死で家族を「くされた」遭族へのサポートを学ぶなかで、ダギーセンターに出会いました。ダギーセンターはアメリカのオレゴン州にあり、親やきょうだいを「くした子どもたちのクリーフケアを行う施設。2008年、ある講習会でその存在を知りました。

参加者の年代、故人との関係、死因などによってグループが分けられ、子どもたちはめいめいに好きな遊びをして過ごします。ユニークなのはボルケーノルーム（火山の部屋）。壁は柔らかな素材で覆われていて、クッションなどが山積みに。そこではどんな大声で叫んでも、クッションを壁に投げつけてもかまいません。感情を爆発させるので、ボルケーノと称されます。

12年、通訳付きのダギーセンターのスタディーツアーが企画され、一度この目で見てみたいと思っていた私はすぐさま参加。そのツアーリーには臨床心理士の西尾温文さん、看護師の畠田秀子さんも参加していたのですが、1年くらいたった時、2人に呼び出されました。

「日本でもダギーセンターの

ような子どものための場所をつくりたい。有閑さんがイエスと言えばやる、ノーと言えば諦める」と西尾さん。押しに弱い私はイエスというしかありませんでした。

14年に3人が設立理事となり一般社団法人エッグツリー・ハウスを立ち上げました。21年に代表だった西尾さんが急逝され、今は私が代表を引き継いでいます。

西尾さんが大好きだったエピソードがあります。初参加の女の子はどんなところか分からず、行きの車中は不安でいっぱい。でも、親御さんから「〇〇ちゃんみたいに誰かを「くした子たちが集まる場所だよ」と聞くと、「そんな子がほかにもいるの?」と目を輝かせたそうです。近しい人を「くした」ということを友達に言えずにいる子どもは少なくありません。ここには自分と同じような経験をした子がいるんだという安心感のなかで遊ぶということが大事なのです。西尾さんが目指したことが間違いでなかつたと実感できたエピソードでした。

（浄土宗蓮宝寺住職、大正大地域構想研究所研究員）

悲嘆抱える子のために 小川 有閑

おがわ・ゆうかん 1977年東京生まれ。早稲田大学卒業後、東大大学院博士課程単位取得満期退学。専攻は宗教学。「自死・自殺に向き合う僧侶の会」などの社会活動にも従事。

（随時掲載）

ほとけさまの



手のひらで

⑧

人が老い、病み、亡くなる過程には介護、看取り、葬儀、納骨、相続といった、家族がすべきことが現れます。

頼れる家族がおらず、自分であらかじめ準備をしておく「終活」も今は普及しています。しかし、それぞれの段階でサポートしてくれる専門職は異なり、たとえば医師や看護師は看取りが終わればサヨウナラ、次は葬儀社がコンニチハ。専門職間の連携はなく、家族はその都度新しい関係を築くしかありません。この現状に対して2012年に経済産業省が「安心と信頼のある『ライフエンディング・ステージ』の創出」を提案しました。ライフエンド(死)の前後をライフエンディング・ステージと規定し、各段階でのさまざまなサポートの担い手の連携を推進しようというもの。超高齢社会の日本では避けては通れない課題です。

私は考えました。僧侶は檀信徒の人生、特に死に深く関わる専門職。生前から死後まで関わる時間は無限だ。それならば、死の前後に関わる専門職たちをつなぐに最適な立場ではないか。これから利益重視で品質

のサービスを提供する扱い手も現れるだろう。こうしたサービスを見極めるには、学びが必要だ。

そんな発想から、13年3月に地元で「ライフエンディング研究会」をスタートさせました。お付き合いのあつた葬儀社、石材店、牧師、行政書士、保健師に声をかけ、初回参加者は6人。以後、毎月欠かさず、23年8月まで126回開催。多い時は30名の参加がありました。のべで千人以上は参加したと思います。

実際に多くの学びがありました。たとえば僧侶と葬儀社はお互いの仕事をよく知っているようで、おそらく10分の1も知りません。知らない部分にこそ、その仕事の醍醐味があるもの。また、対等の立場で腹を割って話すと相手の苦労が分かり、敬意が生まれてきます。

檀信徒から専門外の相談を受けた時でも、他に丸投げするのではなく、私も一緒に考えられるようになりました。全国のお寺がライフエンディング・ステージの総合相談窓口になれたらしいなど夢想しています。

(浄土宗蓮宝寺住職、大正大地域構想研究所主幹研究員)

おがわ・ゆうかん 1977

年東京生まれ。早稲田大卒業後、東大大学院博士課程単位取得満期退学。専攻は宗教学。「自死・自殺に向き合う僧侶の会」などの社会活動にも従事。

(随時掲載)

死の専門職、つなぐ窓口に 小川 有閑

（おがわ・ゆうかん）
1977年東京生まれ。早稲田大卒業後、東大大学院博士課程単位取得満期退学。専攻は宗教学。「自死・自殺に向き合う僧侶の会」などの社会活動にも従事。

「月参り」という習慣を存じでしょうか？毎月、**普提寺**の僧侶が檀信徒宅を訪問し、仏壇の前で読経する習慣です。北海道、東北地方の日本海側、北陸・東海・関西の一部、広島、九州北部などで盛んな一方、日本過半の地域では行われていません。生活の一部と化してい人もいれば、知らない人は全く知らない不思議な習慣です。

実は私、世界でただ一人の月参り研究者なのです。あくまで自称ですが、月参りで論文を書いている人が見当たらないので、あたらずといえども遠からずと思います。

月参りを知らずに育った東京生まれの私が、どうして月参り研究者になつたのか。以前より関西の友人僧侶たちから、月参りの話は耳にしていました。月参りにうかがうと、そのお宅のお年寄りが相手をされることが多く、足腰の痛みや病院の話に花が咲くのだとか。東京より濃密なお寺と檀家の関係に希望の念を抱いたものです。

2018年、国からの研究助成を得て、超高齢社会での寺院や僧侶の役割を研究する機会を

得たとき、月参りが真っ先に頭に浮かびました。高齢者のお宅を定期的に訪問、しかも仏壇のある部屋まで自然に入つていける職種はありません。

読経するだけでなく、心身の不調にも耳を傾けます。独り暮らしの高齢者なら、昔なじみの和尚さんとの会話は孤独感が和らぐひとときになることでしょう。

こうした側面は、月参りの先祖供養という本来の役割とは異なるかもしませんが、国が推し進める地域包括ケアシステムでいうところの高齢者の見守りであり、孤立予防でもあることに気づいたのです。

研究では大阪府の浄土宗寺院を対象にしたアンケートを実施。月参りで訪問するお宅の8割以上に高齢者が在住し、2割近くが独り暮らしの高齢者であることも分かりました。滞在時間は平均30分ほどですが、長いと60分から90分いることも。いかに会話が重要な要素かが分かります。

はるか昔から当たり前のように行われてきた月参りに、実はすごい機能が備わっていることを示すことができました。

(浄土宗蓮宝寺住職)



おがわ・ゆうかん 1977

年東京生まれ。早稲田大卒業後、東大大学院博士課程単位取得満期退学。専攻は宗教学。大正大学構想研究所主幹研究員。「自死・自殺に向き合う僧侶の会」などの社会活動にも従事。
(随時掲載)

月参りは見守りと孤立予防 小川 有閑

ほとけさまの 手のひらで

⑩

普提寺の僧侶が毎月檀信徒宅を訪問し、仏壇の前で読経する「月参り」という習慣を調査するなかで、檀家さんにお話をうかがう機会がありました。大坂のある高齢の男性のお話がとても記憶に残っています。

「おやじが亡くなつた昭和19（1944）年5月25日、それ以来、25日に毎月来ていただいているんです。子どもの頃、母から『あんたは今日は遊びにいってたらあかん、ご住職さんが来てくれるんやから、家で留守番しどくんやで』と言われました。夏でも扇風機はありません。ご住職がお勤めされている間、後ろでうちわをあおぐ。それが私の仕事でした」

「そしたら、ご住職がどこかでいたいたお菓子、これをあんた食べなさい、今日はご褒美やでつて。そんな記憶があります。毎月親の供養をしてもらうのに何も特別な理由はないんです。月参りは当たり前やと思つています。来てもらえなかつたら、何でやろうと僕は思うでしょうね」

戦死した父の月命日の25日、幼い息子は母と共に和尚さんを迎へ、読経の間、亡き父を思つ

たことでしょう。70年以上たつた今、仏間にはその男性の介護用ベッドが置かれていますが、変わらずに月参りを生活の一部として大切にされていることに感銘を受けました。

そのお宅に昭和19年当時訪問していたご住職は既に他界され、今はそのお孫さんがご住職となつて訪問を続けています。

現住職は月参りについて、「月命日にお参りをさせていただく時間というのは、ご遺族にどう自然と亡き人に思いが向くスイッチが入つている場だと思う。そこで僧侶は何かをしなければならないのではない。丁寧にゆっくり寄り添うこと」が僧侶の役割です」と語られました。

現住職は故人を直接知るわけはありません。でも、その男性が語る父への思いにただ耳を傾ける。何かを教え諭したり、布教したりするわけではないのです。故人に意識が向く時間をともにするだけで十分なのだと教えてもらいました。私自身、僧侶としてご遺族にどう向き合うか、指針を得た気持ちでした。

（浄土宗蓮宝寺住職）

おがわ・ゆうかん 1977

年東京生まれ。早稲田大卒業後、東大大学院博士課程単位取得満期退学。専攻は宗教学。大正大地域構想研究所主幹研究員。「自死・自殺に向き合う僧侶の会」などの社会活動にも従事。

（随時掲載）

故人への思い向かう場に 小川 有閑

ほとけさまの 手のひらで

⑪

孤独・孤立が深刻化するなか、政府はその対策としてゆるやかな人と人のつながりの促進をはかっています。ここ10年ほど、地域で社会活動をするお寺を取り材・調査してきた私は、お寺は無限の可能性を秘めていると思っています。

地域住民の交流のためにイベントを開催するお寺、子どもも高齢者も集まる場を提供するお寺、孤立気味の住民に積極的に関わっているお寺など、都会・過疎地を問わず、地域のために汗をかくお寺がたくさんあつたからです。

宮崎県高原町にある浄土真宗本願寺派の光明寺さんを取りました。ご住職の鶴園一麿さんの伴侶・恭子さんはとてもパワフルな方、もともと福祉の仕事をしていて、結婚して初めてお寺に入られました。

恭子さんは独り暮らしの高齢者や病気がちでひきこもり気味の人、家族を「くしたばかりの人など、気にかけているお宅に、自転車での買い物の帰り道やお

かずを多めに作った時にちょっと寄つてみるのです。それが2、3軒のはじこになることは日常茶飯事で、独居のお宅であれば、1時間以上話し込んでしまうこともあります。

お寺に「いる」「行く」ことを大事にしているという恭子さんは「お寺ではかしこまつてしまふから、プライベートなことはなかなか話してもらえない。でも、自分の家でだつたら話してくれる。まさにホームなんですよ」と教えてくれました。

「この町でがんばって生きてきたおじいちゃん、おばあちゃんにこの町で亡くなつてほしいんです。障がいのある子どもがいたら、地域で育てないといけない。おせつかいかもしれないけど、そのための地域の見守り役として、お寺は存在したい」人口減少・高齢化が進み、決して明るい現状とは言えない高原町ですが、恭子さんの言葉からは、この町を愛し、この町で生きていく、と腹をくくつた人の強さを感じました。

(浄土宗蓮宝寺住職)

◇ ◇ ◇

おかわ・ゆうかん 1977

年東京生まれ。早稲田大卒業後、東大大学院博士課程単位取得満期退学。専攻は宗教学。大正大地域構想研究所主幹研究員。「生死・自殺に向き合う僧侶の会」などの社会活動にも従事。

(随時掲載)

無限の可能性秘める寺 小川 有閑

ほとけさまの 手のひらで

(12)

生まれた家が寺だからという理由で僧侶になつた私ですが、わざながら坊さんらしくなつたなど感じたことがあります。

1回目は39歳の時。妻と婚約し、市役所に婚姻届を提出しに行きました。初めての結婚といふものに、一体どんな幸せな気持ちになるのだろうとワクワクしていた私。

ところが、窓口で受理された途端に頭に浮かんだのは「いざれ、どちらかがどちらかの葬儀の喪主になるのだ」ということ。末永い幸せを願うどころか、死を考えてしまつた自分にピックリしました。

2回目は43歳、長女が生まれた時のこと。流産や不妊治療を経験した私たち夫婦には、待望の第1子でした。初めてわが子を抱きかかえた私は、またしても真っ先に「どちらが先か分からぬが、やがて死別を迎えるのだ」という未来の別れを想像してしまつたのです。

人生で幸福を感じるベスト5に入りそうなタイミングで死を想起すること2回。1回目は戸惑いましたが、2回目となると、これは僧侶としての職業病なのだと考へることにしました。

佛教には「生者必滅 会者定離」という言葉があるように、会うは別れのはじめと考えます。人は必ず死ぬわけですから、それは当たり前なのですが、私たちはそれを忘れて、好きな人といつまでも一緒にいられると妄想し、永遠を願つてしまいがちです。特にそくなつてしかるべき結婚、出産の場で、しつかり「死別」に思いをはせられたことに「俺も坊さんらしくなつたな」と感じたのでした。

僧侶の資格をとつて四半世紀、少なからぬお葬式にたずさわり、故人を見送つてきました。年齢も本人の意思も関係なく、時に死は無情にやつてきます。振り返つてみれば、お葬式のたびに「生者必滅 会者定離」を学んできたのかもしません。

それは書物での学びではなく、故人やご遺族から学ばせていただいたものにほかなりません。資格だけの僧侶だった私が、なんとかこうしてコラムを書くまでになれたのも、亡き方々のおかげ。あらためて感謝をして、筆をおきたいと思います。

(淨土宗蓮宝寺住職)

(終わり)

おかわ・ゆうかん 1977

年東京生まれ。早稲田大卒業後、東大大学院博士課程単位取得満期退学。専攻は宗教学。大正大地域構想研究所主幹研究員。「自死・自殺に向き合う僧侶の会」などの社会活動にも従事。